

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）

黒澤 直俊



学位申請者：葛原 亮

論 文 名：スペイン語 -dor/-nte 接辞に関する意味論的研究

< 審査結果 >

審査委員会は、主査に黒澤直俊（ポルトガル語学）、副査として浦田和幸（英語学）、川口裕司（フランス語学）、西村君代（スペイン語学）、川上茂信（スペイン語学）、の5名から構成され、それぞれ専門の見地から論文を精査し、内容を詳細に検討した上で2019年2月18日に公開の最終試験を行った。その後、論文および最終試験の内容について協議を行った結果、本論文は、本学大学院が学位授与のために定めた基準を十分に満たしているだけでなく、優れた高い学術性を示していることが確認され、よって審査委員会は全員一致で、葛原亮氏に博士（学術）の学位を授与することが適当であると判断した。

論文および審査の概要は以下の通りである。

< 論文概要 >

本論文では、スペイン語の -dor, -nte 接辞、およびこの両接辞からなる派生語を扱う。両接辞は動詞に付加されることで、「～する人」、「～する物」という意味の名詞と、語根動詞の主語相当の対象を表す名詞を修飾する形容詞を形成する接辞として広く知られている。本論文の主要な目的は、これらの接辞が派生語の意味の決定に際し、どのような働きかけを行っているのかを記述すること、つまり、両接辞がどのような意味的性質を持つのかを明らかにすることにある。その上で、以下の3点の問題を論じた：

1. 両接辞による派生名詞に多義性が生じるのはなぜか、また、派生語の「多義性の範囲」はどのように説明されるのか
2. 両接辞による派生の容認性を予測することは可能か
3. 両接辞の意味的な共通点、差異はどのように説明されるのか

1. については、両接辞による派生語が、それぞれどのような意味を持ち得てどのような意味を持ち得ないのかを説明することを目指す。-dor, -nte はともに語根動詞の主語相当の対象を表す名詞を形成するが、主語相当の対象であればどのような対象であっても表

せるというわけではない。考察して得られた両接辞の意味的な性質に関する記述を基に、両接辞による派生名詞について、その持ち得る語義と持ち得ない語義を体系的に予測・説明することを目指す。

2. については、両接辞がどのような動詞に付加されることができて、どのような動詞に付加されることができないのかを、意味の観点から予測・説明することを目指す。例えば、両接辞は共に動詞 *secar* ‘乾かす’ に付加され得る (*secador*, *secante*)。しかし、*matar* ‘殺す’ に付加されるのは *-dor* のみであり、*sobrevivir* ‘生き残る’ を基に派生語を形成し得るのは *-nte* のみである。この派生の容認性を左右する意味的要因を特定することを目指す。

3. に取り組む意義は、とりわけ、両接辞間の意味的共通点を説明することにある。両接辞の意味的差異をめぐる先行研究はすでに少なからず存在するが、共通点に主眼を置いて論じた先行研究は確認されていない。また、両接辞間の意味的差異に関する先行研究の記述、主張も網羅的でない。先行研究における問題点などを踏まえ、両接辞の意味的共通点と差異を細緻に記述することで、現代スペイン語において両接辞が共に生産性を保ち、派生に使用され続けている理由を明らかにする。

本論文の構成は以下のとおりである。

まず第 0 章において、両接辞の基本的な形態論的・意味論的性質を紹介し、本論文の目的、取り組む問題がどのようなものであるかを述べる。

第 1 章では、両接辞とその対立関係に関する先行研究を通時論・共時論の両面から概観し、設定した問題について何が明らかになっていて何が明らかになっていないのかを示したうえで、本論文の新奇性、意義を論じる。例えば、本論文ではコーパス等を用いた量的なアプローチを採用しているが、これは従来の質的な研究では困難であった網羅的な分析や、そうした研究で検証されることのなかった提案、仮説の検証を可能とするものである。また、本論文を、語形成の意味論という理論的枠組みの中で仮説を構築し、コーパスを用いてその仮説を検証するコーパス検証型研究として規定する。

第 2 章から第 6 章では、章ごとに両接辞の形成する様々なタイプの派生語、とりわけその語義、用法を観察し、その結果から接辞に含まれる意味的性質を推測・検証する。

第 2 章で分析するのは、コーパス中 20 世紀以降に一度以上使用され、かつ辞書に記載のある両接辞による派生名詞である。これらの派生名詞の語義を網羅的に分析したところ、両接辞による派生名詞の表す対象は全く異なる分布を示すことが判明した。具体的には *-dor* による派生名詞のみが、使役性と動作に対するコントロールという二種類の意味的素性を併せ持つ対象を表すこと、また、そのいずれも持たないタイプの対象は *-nte* の

みが表すことなどが明らかになった。一方、これらの二種類の素性について、どちらかが陽性でどちらかが陰性というタイプの対象であれば両接辞による派生名詞が形成可能であることも確認した。この観察結果を基に、両接辞の外項編入のパターンは語根動詞の主語相当の対象における使役性、動作に対するコントロールという2つの意味論的素性の値の組み合わせと密接な関係にあるという提案を行う。

第3章では、第2章で提案した仮説を検証するために、両接辞による新語的派生名詞をコーパスや新語辞書から抽出し、第2章と同様の分析を実施した。新語を取り上げるのは、これらの派生名詞の意味の決定には動詞と接辞の意味以外の要因の関与が少ないためである。逆に言えば、古くから使用されている派生名詞は、語義の決定に語根動詞の語義と接辞の意味的価値以外の要因が介入している可能性があり、これらを分析することは妥当な手法ではない。例えば16世紀から用いられている派生名詞 *despertador* は、現代スペイン語においてはもっぱら、‘目覚まし時計’を表す。これは語根動詞 *despertar* ‘起こす’ と *-dor* 以外の要因、つまり派生名詞が長い間にわたって用いられ続けたことで意味が固定化されたことによると考えられる。新語的派生名詞に限った分析の結果、仮説の大筋での妥当性が明らかとなった。

続く第4章では、両接辞による形容詞を分析した。具体的には *secador/secante* のような同一語根動詞からなる派生形容詞のペアを分析の対象とし、こうした形容詞による N + A 型のコロケーションを観察することで、両派生形容詞がどのような名詞を修飾することができ、あるいは修飾することができないか、またそれらが典型的に修飾する名詞がどのようなものであるかを明らかにする。この分析結果も、第2章で提示した仮説の妥当性を示すものであった。この分析には、質的アプローチによる先行研究における予測の検証としての意義もある。

第5章では、Rainer (1999) が「新しい用法」とした、両派生形容詞の非主語的用法を記述する。この用法は比較的近年に用いられ始めたもので、両接辞による派生形容詞の基本的用法である主語的用法と一線を画す独立した用法である。主語的用法においては、両派生形容詞の修飾する名詞は形容詞の語根動詞の主語相当の対象を表すので、関係代名詞と定動詞を用いて *que V* と言い換えられる (*hombre fumador = hombre que fuma*)。非主語的用法は、このような関係代名詞による言い換えが不可能である一方、前置詞 *de* を用いて言い換えられる用法を指す (*habilidad lectora = habilidad *que lee/de leer*)。第5章では、この用法を、名詞と動作を関連付け、分類・限定する用法、すなわち関係的用法と規定した。その上で、*-dor*, *-nte* 両接辞による派生形容詞の関係的用法は19世紀の

中ごろからスペイン語に定着し、現代では非常に生産性と使用頻度の高い用法であることを指摘した。

この関係的用法というレベルにおいても、両派生形容詞は同語根ペアを形成する。例えば、*acción limitadora/limitante* は共に容認される名詞句であり、かつ、いずれの派生形容詞も関係的解釈をとる。第 6 章ではこうした関係的解釈を持つ派生形容詞の同語根ペアを分析することで、関係的形容詞を派生する接辞としての *-dor, -nte* の意味的共通点と相違点を考察する。コーパスを用いた分析、およびインフォーマント調査の結果、両接辞による関係的派生形容詞の差を生み出すのは、意味上の主語の選択に関わるルールであることが判明した。意味上の主語とは、実際に関係的形容詞の語根動詞の表す動作を遂行する主体を指す。例えば、*acción limitadora* のケースでいえば、この語句が使用される文脈を広く観察すると、*acción limitadora del aparato* ‘その装置の制御行動’における *aparato* のように、実際に *limitar* という動作を遂行する対象が意味上の主語にあたる。そしてこの意味上の主語の選択に関するルールはこれまでに見てきた派生名詞の語根動詞主語の編入、ならびに主語的派生形容詞の名詞修飾に関わるルールと同一線上のものであった。つまり、*-dor* は動作に対するコントロールか使役性のどちらか一つ以上が陽性であるような対象を意味上の主語として選択し、*-nte* はいずれも陽性である対象を意味上の主語として選択することができないことが明らかになった。

本論文では両接辞による派生名詞、新語的派生名詞、主語的形容詞、関係的形容詞を分析し、いずれのレベルにおいても、両接辞の差異は派生語が編入ないし修飾をする要素の、動作に対するコントロールの有無と使役性の有無という二種類の素性の値の組み合わせにより説明できることを明らかにした。

最終章である第 7 章ではそれまでの議論を振り返り、第 0 章で設定した 3 つの問題を論じた。

1 点目の多義性が生じる理由は、編入に関わる規則が二種類の素性の組み合わせという柔軟性を持つものであるためであると考えられる。多義性の範囲についても、分析を通じて得られた規則から説明、予測可能となる。

2 点目の両接辞による派生の容認性については、両接辞の主語の選択に関わる規則から説明できる。いずれの接辞も、編入、修飾することのできないタイプの主語しか持ち得ない動詞には付加され得ないといえる。例えば、動詞 *sobrevivir* の主語は動作に対するコントロールも使役性も持ち得ない。そして *-dor* はこの二種類の素性のうち、いずれかが陽性でなければ編入・修飾することができないため、*sobrevivir* には付加されない。

3 点目の両接辞の共通点と差異は、両接辞の主語選択に関わる規則の共通点と差異とし

て説明できる。二種類の素性のうちいずれも陽性という高い動作主性を持った対象を選択可能なのは -dor のみで、いずれも陰性となる低い動作主性の対象を選択し得るのは -nte だけである。一方、いずれかが陽性で他方が陰性であるという対象は、両接辞が選択し得るという点で共通している。両接辞は共通するタイプの主語を選択する接辞であるが、本質的にはそれぞれ異なるタイプの主語を編入する接辞であり、これこそが現代において、いずれも生産性を保ち続けている大きな理由であると言える。

< 審査概要および評価 >

審査委員会は、特に次の 2 点を高く評価した。

1. 研究対象である接尾辞の意味論的性質について、コーパスを用いた網羅的な調査で仮説を検証し、先行研究が成し得なかった包括的な説明に成功したこと。また、それによって 2 つの接尾辞の共通点と相違点を統一的な観点から明らかにしたこと。
2. 新しい用法である非主語的用法を正面から取り上げ、詳しく記述したこと。また、この用法が従来の主語的用法と意味論的に共通の性質を有することを明らかにしたこと。

反面、先行研究の検討が紹介にとどまって議論が不足している部分があるとか、対象を新語に限る方法論の位置付けが分かりにくい、また問題設定と論文のオリジナリティーの関係が明瞭でないといった批判があった。これらについて葛原亮氏は、自身の見識に基づいて真摯かつ的確に応答し、審査員を納得させた。本論文の限界や問題点についても十分な自覚を持っており、今後さらに研究を深める中で解決されることが期待される。ただし、これらの批判のいくつかは、今後の研究展開において解決されるべき点で、研究そのものの価値と完結性に影響するものではないことは審査委員全員の共通理解である。

以上のことから、審査委員会は最終的に審議をした結果、本論文は博士（学術）の学位を与えるにふさわしい学術的成果であると判断し、葛原亮氏の今後のさらなる研鑽に期待するという認識で一致した。